

実習報告（基盤教育実習）

構成主義的学習観にそった授業の検討と考察 — 体育科の授業を視点に —

清水 皓太（授業実践探究コース）

【探究実習のテーマと設定の理由】

体育科の授業においては、現行の学習指導要領体育編で「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」と述べられているように、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現することを目標としている。しかし、今日の体育科の授業では、技術・技能を習得することが目的とされた授業が多く展開されているように感じる。言い換えるならば、基本的な技術・技能を習得することが学習のゴールとなっているということである。このような学習では、教師が設定する技術・技能に関する目標を達成できなかった子どもは、その運動やスポーツに対して、面白さや意義を見出すことができなくなるのではないだろうか。それは結果として、豊かなスポーツライフを実現することを阻害してしまう要因となり得ると考える。

また、文部科学省（2015）は現在の子どもたちの体育に係る実態として「体力が低下してきている」ことだけでなく「運動する子供としない子供の二極化傾向が続いている」ことを課題として挙げている。この二極化が生じている背景には、体育の授業において上述したような授業展開がなされていることが影響しているのではないかと考えられる。

そこで、体育科が目標として挙げている項目を達成するために、単に技術や技能を習得するだけの体育の授業ではなく、子どもたちがそれぞれのスポーツの持つ特有の面白さに触れることのできるような授業、つまり運動の機能的特性を実感させることのできるような授業を展開していきたいと考える。機能的特性を実感できることで、特定の技術・技能を習得することにとどまらず、特定の技術・技能を基礎としながら様々な方向へ自ら考えて活用できるような能力を子どもたちに身に付けさせることが期待できる。

あるスポーツにおける知識や技能を、そのスポーツの文化が内在させる意味から切り取って習得するだけの学習では先の活用力を補うことは困難である。松田（2016）は『「意味ある経験を通じた知識、技能等の再構成」を学習と捉える』と述べ、こうした学習の捉え方は構成主義的学習観と呼ばれている。この構成主義的学習観の述べる“意味”とは物事の文化的側面を包含するものと考えられており、機能的特性の概念と一致するところがある。そのため、機能的特性を実感させるための学習観として構成主義的学習観を援用したいと考える。

今回の基盤教育実習においてこの構成主義的学習観を軸として、体育科における機能的特性を実感できる授業展開について考察する。

【探究実習の研究目標】

- ①実習校及び児童の実態把握を行う
- ②実習校の先生方や児童たちとの関係性を築く
- ③自身の研究テーマを意識した授業観察や実践を通して研究テーマを考察する

【探究実習の概要】

メンター教員が担任を務める学級に継続して入ることになり、実習クラスは固定されることとなった。主に授業中では、メンター教員の授業を参観させてもらいながら、T2として机間指導を行い、児童のつまづきや困り感に合わせて学習の助言や個別指導を行った。参観するにあたっては、各教科に存在する単元や領域における機能的特性に視点を置いた。また、授業時間外となる昼休み、給食の時間、掃除の時間、朝の会・帰りの会においてもできる限り児童と時間を共有することで児童との関係性づくり並びに実態把握に努めた。

基盤教育実習の終盤には授業実践を行った。実践の内容は、主に1月（3学期）より8時間構成での体育科器械運動領域の跳び箱運動の単元であり、授業づくり及び授業実践を行った。その際には自身の研究テーマの視点を踏まえるため、構成主義的学習観をもとに機能的特性に触れることができるような課題設定を行った。現在は8時間構成中の4時目を終えた段階である。

【探究実習の成果と課題】

成果については実態把握が挙げられる。実態把握では、大きく分けて教師の仕事についての実態と児童の実態についての成果を得ることができた。

教師の仕事については、担任教師の1日の職務を間近で見ることができたこと。1日の中では、児童と接する授業や生活指導、学級経営、さらには児童と直接は関係しないところでも宿題チェックや授業計画など様々なものがあることが分かった。その中でも特に印象的だったことは、学級経営についてである。学級経営は特別活動の時間や生徒指導等により学級生活の中で総合的に行われるものであるが、所定のクラスで実習を行う中で児童を認めることが一番大切になるのではないかと感じた。実習を行ったクラスでは、係活動や委員会の活動の場が1日の生活の中に取り入れられており、クラスの一人ひとりが活躍できる機会が保障されていた。役割を果たすことができた時に、教師や周りの児童が感謝の気持ちを表すことによって、児童の自己肯定感が高まっていることが伺えた。そしてこの自己肯定感の高まりが結果として学級経営に繋がっていると感じた。また、その際に必要となってくるのが、児童の性格や人間関係、家庭環境といった児童の実態把握であり、児童の実態に合った言葉かけが必要となることが分かった。児童の実態把握の大切さを改めて認識し、児童の観察や児童との関わりを大切にしながら実態把握に取り組み、実態を把握することができてきた。

課題については、体育科の器械運動領域にあたる跳び箱運動の単元を持たせてもらい、授業実践を行うことで明らかとなった。

自身の研究テーマとして構成主義的学習観という学習観をポイントとしているが、それについて私自身が整理できていないということである。理論を実践レベルで考えた際に、児童の実態や学習環境に合わせた理論の援用に困難を感じた。来年度の課題探究実習のことを考えても、改めて自身の研究（理論）について改めて精査することが課題であることが分かった。来年度の実習に向けて改めて理論構築を行いたい。

また、授業の実践力としてもさらなる向上が課題となることが見えてきた。児童の課題意識を高めること及び課題意識へ向かう意欲の向上において不十分さが伺え、どのような手立てが有効であるのかを掴むことができなかった。これについては、今後の実習においてさらなる実践の機会を頂き、実践経験を積む中で、基盤教育実習における授業参観等で学んだことを実際に自身の実践で試したり、メンター教員に助言を頂いたりしていきたいと考える。